

# 経済危機の構図

(2)

日専連名誉講師 富山短期大学名誉教授 川中清司

## バブルは実体のない泡沫

バブルとは泡のことであり、資産価格が实体经济の成長をはるかに超えて膨れ上がった状態をいう。一八世紀のイギリスに登場した「南海会社」が、投機によって株価が異常に高騰したが、やがて急落して投資家たちは大損害を被った。この事件を「南海の泡沫事件」と呼び、これがバブルの語源となった。

要するにバブルとは、不動産や株式などの資産価格が、投機によって異常に急騰することであり、实体经济の成長では維持できない資産価格で、実質的に中身がなく膨張した部分は、早晚、崩れ去る運命にある。

株値上がりの思惑はずれ、土地神話の崩壊、政策金利の引き上げなどが引き金となって、価格が下落し、投機集中が静まり、バブルは解消する。

## 国全体で投資熱が過熱し 平成バブルが起きた

我々が経験した平成バブルでは、日本全体で投機熱が過熱した。特に土地投資が盛んだった。「土地

は必ず値上がりする」という土地神話が信じられていた。地価高騰はずさまじく、東京都二三区地の価でアメリカ全土が買えるほどに上昇した。

神田駿河台の日専連本部のあたりは、バブルの絶頂には坪当たり一億円以上に値上がりした。今では半分以下に落ち着いている。

東京都内の中心部に代々住んでいる都民は、親が亡くなると住み家の土地の評価が高くて、相続税が巨額となり、売り払って家移りしなければならぬという現象も起きた。

銀行が土地売買をあっせんしたりして、担保評価も通常の七〇%をはるかに超えて、北海道拓殖銀行では一二〇%を融資していた。株価も一九八九（平成一）年の暮

れの大納会には、最高値三万八九一五円を付けたが、湾岸戦争と原油高や公定歩合の引き上げなどのあと、九〇年一〇月一日には一時二万円割れとなり九カ月で半値近くに暴落した。

バブル崩壊で資産価格が下落すると、企業のバランスシートは資産が減少し、借金だけが残る。一気自己資本が縮小する。金融機関は貸出しを渋り、貸しはがしも

起きる。資金不足が起こり経済全体が萎縮していく。

## オランダのチューリップバブル 投機の大衆化と先物取引

バブルの歴史は、すでに一七世紀に始まっている。オランダが世界貿易の覇者となったのは一七世紀の前半で、東インド会社を筆頭に世界中に貿易船が姿を現し、江戸時代には日本にも来ている。オランダ市民たちは、同社の株主となって利益を得ていた。そのころオランダにチューリップが上陸した。

オランダの気候は、もともとチューリップの栽培に適していて、美しい花は王侯貴族に愛され、園芸家が育っていた。次第に国民の間で取引が盛んになり、珍しいものは高額で売られた。球根一つで邸宅を交換するという取引も行われ、白と栗色の品種は三〇〇ギルダー（約一五万円）の値が付き、数カ月のうちに四五〇〇ギルダーにはね上がったという。

投機家が目をつけたのは、一六三四年ごろといわれ、たちまち海外からの球根投資が始まり、多額の信用取引が広がった。彼らはチューリップの栽培には関心がな

く、各都市で球根売買を進め、多額の利益を得ていた。

投機ブームが過熱し、実際に現物を伴わない先物の取引が行われた。「支払は来年の四月で、そのときに原物の球根を引き渡す」といった形で、しかも、「内金」というやり方も生まれた。これらの取引きの場所は、正規の取引所ではなく、酒場などで行われた。

ところがある日突然、売りに出た球根に値が付かなかったことから買い控えが起こった。売り浴びせが広がり、たちまち一〇〇分の一に暴落していった。手形は不渡りとなり、債務を払えぬ者は夜逃げ逃亡し、オランダ各都市はパニックに陥った。議会や市当局は、「調査が終わるまでチューリップ取引は保留する」という決定を出して、ようやく終幕を迎えることとなる。

### イギリスの南海泡沫事件 奴隷貿易の利権から官製バブル

一七一一年、イギリスに「南海会社」が設立された。当時のヨーロッパは、三角貿易が盛んだった。ヨーロッパからは、毛織物や武器が西アフリカへ。西アフリカからは捕虜にした奴隷を積んで西イン

ド諸島へ。西インド諸島からは砂糖や綿などがヨーロッパへと、それぞれの海流に乗って貿易されていた。

砂糖や綿の「白い積荷」に対し、奴隷は「黒い積荷」と呼ばれ、商品として扱われていた。イギリスは独占的な奴隷供給権を持っていた。一六世紀以降、ヨーロッパ商人が奴隷貿易に進出し、三世紀の間で約一〇〇〇万人の黒人が奴隷として売られた。奴隷船の後ろには海に投げ捨てられる奴隷の死体を狙って鯨が群がったという。

南海会社は、イギリスの財政危機を救うために、国債の一部を引き受け、奴隷貿易によって得た利益で、それを賄う目的で作られた貿易会社だった。

経営がうまくいかないのに、一七一八年に富くじを発行して成功し、南海会社は金融機関へと変わっていった。会社は巨額の公債を引き受ける見返りに、額面等価の株式発行許可を勝ち取ったが、巨大な上納金を政府に納めねばならなかった。

そこで立てたのが「南海計画」で、スペイン領南米の金銀鉱山と独占的に取引するというものだった。新天地の金銀鉱物で利益を夢見

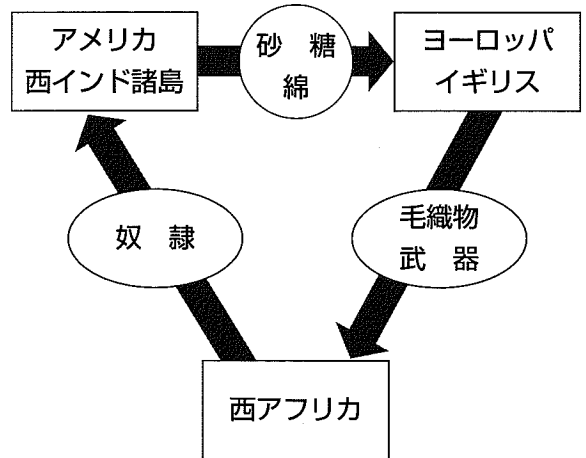
た投機資金が殺到した。わずか数カ月で株価は一〇倍に高騰し、バブルは絶頂に達した。しかし計画の実体は埋蔵量も不明で、スペインがイギリスに通航権を認めるかどうかも未確定だった。

突然、株が下がり始めた。貴族、ブルジョアジーを始め、多くの投資家たちが巨額の損失を被った。このバブルの背景には国家の財政の穴埋めという意図があった。いわゆる官製バブルと言えるものだった。

この事件の解決にあたったのはロバート・ウオルポールだった。数年のうちに事態を收拾し、再び経済を軌道に乗せた。そして、第一大蔵郷として一七四二年まで政権を担当することになる。「国王は君臨すれど統治せず」というイギリス議員内閣制の基を築くことになるのである。

### ミシシッピー計画バブル

南海泡沫事件と時を同じくして、



大西洋の三角貿易

フランスではミシシッピー計画に伴う株価の高騰が起きた。一七一七年、ミシシッピー会社の経営権を握った政治家のジョン・ローが、ミシシッピー川流域の北米フランス領植民地と貿易する権利を手にした。

一七一八年に総司令官が、その地域の三角州に新しい町を建設した。同社はフランス政府から北米、西インド諸島との貿易に独占権を保証され、ほかの有力な貿易会社を併合して王立銀行を所有するに至った。

こうしてこの会社に対する投資

熱は過熱した。株価は当初の五〇〇リーブルから三〇倍にはね上がった。だが突如として暴落の日が訪れ、五〇〇リーブルに転落した。取り付け騒ぎからパニックとなり、フランス経済は混乱に陥った。一九二〇年、ジョン・ローは解任され国外に逃亡した。

## 日露戦争とバブル

一九〇四（明治三七）年、日本は軍事大国ロシアに対して宣戦布告した。当時ロシアは南下政策をとり、その手は満州、朝鮮にまで伸びており、それを阻止するためだった。明治維新からわずか四〇年足らずの日本は、大国相手に戦うだけの国力はなかった。巨額の軍需費はイギリスからの調達で成功した。

陸軍は中国本土に上陸して各地で戦いを進め、旅順要塞を陥落して奉天を占領した。与謝野晶子の弟も、この戦場にいた。「君死にたもうことなかれ」と歌ったのもこのころだ。

海軍は日本海海戦でバルチック艦隊を破り、ロシアは講和の席に着かざるを得なくなった。ポーツマス条約が結ばれ、戦争は終結し

17～18世紀に起きたバブル

|       |                 |  |
|-------|-----------------|--|
| 1637年 | オランダのチューリップ・バブル | 世界初のバブルといわれる。球根の取引が過熱し、先物取引などで高騰したが崩壊した。         |
| 1720年 | 英・南海泡沫事件        | 南海会社の株の高騰と暴落。背後には英国の財政穴埋め政策があった。バブルの語源となる。       |
| 1720年 | ミシシッピー計画バブル     | フランスの会社がミシシッピー川の流域開発を計画。貿易会社は銀行まで所有するが、バブルが崩壊する。 |

た。国民は提灯行列をして戦勝を祝い、勝利がもたらす利益を期待した。戦場で肉親を失い、生活が良くなれない人が多かった。しかしロシアからは南樺太を割譲させただけで、賠償金は取れなかった。期待が破られ不満が爆発し、日比谷公園の焼き討ち事件が起きた。乃木希典將軍は二人の息子を戦場で失った。「一人息子と嘆いちゃ

ならぬ、二人亡くした父もある」と涙で歌った戦死者の親もいた。一方では、戦争バブルが起きていた。軍需関連の企業などは巨額の利益を得ていた。

## 戦争成金の登場

株でぼろもうけした人を成金さと呼んだ。その代表格は相場師の鈴木久五郎だ。日露戦争の最中、株売買で大もうけをした。

彼の戦法は専ら強気一点張りの「仕手戦」だった。鐘紡の株をめぐって神戸の華僑・呉錦堂とすさまじい攻防戦を繰り広げた。日比谷焼き討ち事件で株は暴落し、取り付け騒ぎが起きたが、再び株価は上昇した。東京鉄道株の大量買い占めや、日本精糖株を買い占めて役員を辞任に追い込むなどした。一九〇六（明治三九）年、戦争特需の大相場で大当たりし、もうけた金は一〇〇〇万円、今の三〇〇億円で相当する。

彼は、日本に亡命していた孫文にも革命資金を貢いだ。ところが、一九〇七（明治四〇）年、バブルの反動が始まった。株価は年初の七七五円から年末には九二円で八八%の暴落率となった。このため

全財産を失い借家住まいとなった。

## 世界大戦と船成金

日露戦争のあと不況が訪れ、国の財政も累積した国債と赤字貿易で窮乏したが、一九一五年に始まった第一次世界大戦が、ピンチを救うチャンスとなった。

ヨーロッパ諸国が戦争のためにアジア市場から一時撤退したことで、日本の進出が可能となり、日本への輸入品が減少し、さらにアメリカの好況が幸いして、日本の輸出が大幅に伸びた。日本は債務国から一転して債権国となった。このころ「船成金」が続出した。料亭で豪遊した成金が、玄関を出るとき足もとを照らすのに百円札を燃やした。一晩に数カ所の宴会を張って畳に銀貨をばらまいて芸者に拾わせたとか、江戸時代の紀伊国屋文左衛門まがいの話も伝わっている。

内田信也は三井物産の一社員だったが、戦争で世界的な船舶不足を予見して海運会社を興した。中古船をチャーターして、又貸しながら次々と暴利を得た。やがて内田汽船に発展し、一九一九（大正八）年には資産総額七〇〇億

円（今の一兆八〇〇億円）の大企業に成長した。

その後を訪れた恐慌にも素早く手じまいし、整理した。政界にも進出し、戦前の岡田内閣で鉄道大臣、戦後は吉田内閣でも農林大臣となり九一歳の天寿を全うした。

第一次世界大戦は日本の資本主義を大きく発展させ、成金時代をもたらした。工場労働者が増え、都市人口が増えた。しかし米価は高騰し民衆の生活は苦しく、貧富の差が広がり、ロシア革命の衝撃のうちに、デモクラシー運動が高まる時代でもあった。

## 越中女一揆の米騒動

一九一八（大正七）年七月二八日、富山県の魚津町に一隻の輸送船が着いた。北海道へ米を輸送する伊吹丸だ。米の値段が高騰して、苦しむ漁師のおかみさんたち数十人が、大町海岸の十二銀行の倉庫前に集まり、米の積み出しをやめるように要求した。

立ち上がった女性たちは、米の値段が上がる詳しい仕組みは知らず、ただ「今日食う米が欲しい」「ここから県外へ持ち出さないでほしい」という切実な要求だった。

その夜には百数十人に増え、米穀商に押しかけて出荷を阻止した。運動は高岡市など各地に広がり、滑川町では二〇〇〇人の群衆が米穀商を襲って船への積み込みを阻止し、警官隊が出動して対峙した。

この事件が「越中女一揆」として全国に報道され、全国的な米騒動に発展した。全国七六八カ所、七〇万人が参加、ついに軍隊が出動・発砲し、一四人が殺された。

## 「ぼられる」は「暴利」が語源

米騒動の発端となった米相場価格の上昇は、世界大戦の特需によって発生した成金マネーが、米相場に流れこんだためだ。政府は「暴利取締令」を出して、米、鉄、石炭などの買い占め、売り惜しみも禁止した。しかしこの効果はなかった。

今回の金融バブルで巨額の暴利を稼いだ連中に、なんの対策も打てない今の政治よりは、せめて取締令を出して取り締まろうとした当時の政権の方が、まだ良心的だったかもしれない。「暴利をとる」から「ぼられる」の言葉が生まれた。「あの飲み屋でぼられた」など、今でも使われている。

## 戦争景気と米投機

大正米騒動の背景には、次のような経済情勢がある。第一次大戦で日本が造船、鉄鋼を独占して好景気に見舞われた。農村から都市部へと人口が流出し、米の生産力が低下し、戦争の影響で輸入米が減るなど、米の需要増と供給減というアンバランスが生じた。

一九一八年の上半期に、堂島米会所の相場は二倍にはね上がった。神戸米会所の相場も七月二日に一升三四銭三厘だったものが、八月九日には六〇銭八厘と急騰した。米穀商や地主による米投機が始まり、売り惜しみ、買い占めが起きた。

こうした中でロシア革命が起こった。寺内内閣はシベリア出兵を宣言した。米需要の増加を見越して投機の勢が強まった。米騒動によって寺内正毅内閣は退陣に追い込まれる。続いて生まれた原敬内閣によって、本格的な政党政治の幕開けとなる。

## 明治の米騒動

富山県では明治時代にも、毎年

のように米価暴騰による騒動が起きた。明治二年の「ぼんどり騒動」では、県東部全域を巻き込んで数千人が参加した。明治八年から四五年まで七回起きているが、大規模なものでは次の二つがある。

一八九〇（明治二三）年、一月一八日、富山市で市役所や資産家に対して救助要請運動が始まり、以後、全国一九カ所（鳥取、新潟、福島、山口、京都、石川、福井、滋賀、愛媛、宮城、奈良などの各県）で騒動が発生、新潟県佐渡市相川町では二〇〇〇人が蜂起し、軍隊が出動して鎮圧した。

一八九七（明治三〇）年、五月下旬、富山県魚津町の騒動をきっかけに、石川、長野、山形、新潟、長野、福井の各県など一〇カ所で発生。長野県飯田町では約二〇〇〇人が暴徒と化し、米問屋や警察などを襲撃した。

富山が北陸の米騒動の発祥の地となった。加賀百万石の米は越中富山で約半分、能登で約二割五分を生産した。その米を地元者が食べられず、投機的な形で外へ移出されてしまうことへの抵抗があった。都会で起きた米価高騰に抵抗する消費地型の騒動とは異なる要素が見られる。